活動報告

「クンストラウム・クロイツベルク / ベタニエン」教員等派遣報告書

▸唯根響子

1. はじめに

私は、「被写体と私の関係性」を重視して長年撮影に取り組んできた。 私生活の中で出会った人物と何度も撮影を繰り返し、この人の何に惹かれて撮影をしているのか、この人の何を伝えたいのか、模索し、実験的な制作を続けている中で、「私」自身という人間を知ることも多くなっていた。シャッターを切るタイミングには、撮影者の人間性が出るのではないかと思うが、私は他者との間で、どうしてもファインダーを通して撮影する行為の中でも超えられない境界線があることに気づいた。写真を現像しプリントしてみて振り返ると、それは顕著に表れていた。自己表現である写真だったら、イメージの中でも被写体との間にある線の向こう側にいけるかもしれないと思い、「自身と他者の境界線」をテーマに撮影を続けている。「境界線」という一つのキーワードが出てきたときに、なかなかその向こう側にいけないこともあり、線ではなく、壁のように感じることが多々あった。ベルリンの壁崩壊では、物理的な壁と精神的な壁、一個人の壁と社会的な壁の崩壊ではないかと考えた。その崩壊は、私の求める表現ではないかと思う。その二つには何か共通することがあるのではないかと思い、模索しながら現地での制作を進めていきたいと考えた。現地では、他者との壁をテーマに、ストリートスナップを撮影した。言葉の通じない人・文化の違い、コミュニケーションの難しさ、生活の中で様々な境界線を感じることがあるのではないかと考えた。街を歩き、肌身で感じ、日々の中での発見を撮影した。

それとは逆に「自身の中の境界線」をテーマに撮影をしようと考えた。上記でも述べたように、私には他者との間にどうしても超えられない境界線があるのではないだろうか。その壁を超えられないということは、私が撮りたかったイメージを被写体に伝えることができなかった時に感じることがあった。例えばヌードになってほしい、少し危険なことをしてほしいなど、被写体に対して気が引けてしまうことが多々あった。では自身で、他者に伝えられなかったことをすればどうなるのか、セルフポートレートを撮影をしてみた。また、多くの世界的有名な写真家の展示や、日本では見ることのできないアート作品や美術作品を見ることができる期間だった。滞在中はハイレベルな芸術的表現を見て、感じ、インプットし、自分の中で消化し、アウトプットしていくことでさらに視野を広げ、自身の表現の発展を目指すことを目的とし、ベルリンでの制作を進めていくことにした。

2. ベタニエンについて

ベタニエンの「Tokyo Arts and Space」はアトリエと併設して住居空間（図1）がある。アトリエは広々としていて（図2,3）日本で撮影していた写真を並べて、全体を見るには十分な広さだった。まずはじめにテーマを見直し、考えを深めようと思い、アトリエでの制作を開始した。ベタニエン内には、多くのアートスペースがある。 バレエ教室などからアーティストの制作スペースとしても使われており、観光客も出入りするので、日中は賑やかになるときもある。

3. 現像について

今回のドイツ滞在2ヶ月の間では、フィルム写真による撮影のみに絞ろうと決めていた。フィルム写真はフィルム現像からプリントまでアナログでの作業になるが、フィルムと現像液との相性や温度管理など、予想外の結果になるのが気に入っていた。実際に撮影していると、現地の日中の光は日本より鋭く、シャドウの出方が面白かった。撮影したフィルムをアトリエに戻ってから、現像してみると少し眠たく（ボンヤリとした）現像された。(図4）原因追求をしたところ、様々な要因はあるとは思うが、現像液とフィルムの相性の他に軟水の日本とは違い、ドイツは硬水のためそれも理由の一つになっているのではないかと考えた。その土地の水質によって、違いが出るのであればとても面白いと思った。 今回フィルム現像を自ら行うにあたって、実験的にフィルムの粒子を大きく出すために、敢えてISO感度を高くして、現像時間を長くした。フィルムならではの美しい粒子を出したいと考えていたためだった。また次に停止現像も試してみたかった。現像液を通常の比率よりも原液を

さらに薄めて、3倍以上の時間を使って現像作業をしていくものだ。上記でも記したように、通常の現像でもぼんやりしたような仕上がりだったため、予想していた時間よりも多めに現像時間を伸ばしてみたところ、大した変化はみられなかったが、何度か調整をしていくうちに理想の結果に近づいていった。(図5)

4. ストリートスナップ

今回滞在したベタニエンはイーストサイドギャラリーのすぐ近く、東ドイツ側にあった。街並みはヨーロッパならではの美しい建造物と、公園など自然が多く、どこを切り取っても美しかった。しかし東ドイツと西ドイツ、分断されていた頃の名残は確かに感じ取ることができた。個人的な意見になるが、西ドイツは銀座や青山のようなブティックやハイブランドの店舗が多かったのに対し、東ドイツは少し浮浪者なども多かった印象がある。見えない「境界線」は確かにそこに感じた。鉄道が国内に行き渡り、隣国へも行きやすい国であったため、滞在中の移動手段は電車だったが、遠くへ行っても帰りはいつも徒歩で帰ることにしていた。街を歩くとアクシデントは多かったが、いつでも新鮮な気持ちで撮影に臨めることは素晴らしいことであると同時に、日本に戻ってもアンテナは貼り続けるということの大切さを感じた。(図6, 7, 8, 9)

5.「境界線」

知り合いもいない、文化や言葉も違う土地での制作はモデルを一から探していかなくてはならなかった。「1. はじめに」で述べたように、「被写体と私の関係性」での制作では特定のモデルを長期撮影していたが、遠く離れた土地で改めてその撮影方法から離れてみようと考え、今回は「他者」を使わずに「自分」の中の「境界線」を探ってみようと試みた。「自身の中の境界線」を探る上で、セルフポートレートに挑戦してみた。実際に撮影してみて、自身と他者の間に感じていた「境界線」のようなものは一切感じることはなかった。私の中には一線はなく、ストレスを感じることなく撮影に臨むことができたが、逆に言えば被写体がどう動くのかが明白な上に、撮られているという意識が写真の中に表れたと思う。(図10, 11, 12, 13, 14, 15) それは他者を撮影している時、レンズを向けられた被写体の気持ちを改めて再確認できたのは大きいと思う。撮られる、撮られているという感覚は、よく写りたい、美しく写りたいという気持ちを生み、その人の本質を隠してしまっていた。撮られているという感覚を感じてしまうのは、カメラのレンズを意識した時に起こり、被写体と私との間の境界線との他に、「被写体とレンズの境界線」を強く感じた。私が求める、被写体と撮影者の関係性によってできる「見えない意識的な境界線」と、レンズという「見える物質的な境界線」は、共通してその被写体の本質を表現するのに妨げるものであって、薄くしていかなくてはならないということがわかった。

また、セルフポートレートを一つの作品として撮影していく中で、自撮り写真と作品としてのセルフポートレートは何が違うのかという新しい疑問も浮かんだ。今後の制作に続く、大きなヒントを得たように思う。

もう一つ、「境界線」について模索していく中で「国境」というキーワードからも考えていった。日本から13時間離れた場所に長期間滞在していると、母国を客観的に考えてみることが多くなった。周囲を海で囲まれている日本は他国へ行くのにどうしても海を渡らなくてはならない。陸続きのヨーロッパでは、シェンゲン協定国内の入国審査はほぼ無いに等しい。ベルリンから長距離バスでアウシュヴィッツ強制収容所へ行くときも、ポーランド入国の際にはパスポート提示は特になく、ここがドイツ内外なのかを忘れてしまうほどだった。国と国の境界線は海である、と無意識にあった概念は打ち砕かれ、線だと思っていた海は面であった。新しい感覚の中で海を見たいと思い、北ドイツのバルト海に行ってみた。

行った当日はトラブル続きで、撮影は断念せざるをえなかったので、一日中波を観察していた。ベタニエンに帰ってきた後はその波の動きが印象的で、ひたすら渦を描いた。(図16) 描いた渦と写真を転写し、その上からイラストレーションを描いてみた。(図17) 帰国してからは、ベタニエンでひたすら描いていた渦の上からシルクスクリーンで、後日ギリシャの海で撮影した少年を上から印刷した。(図18)

6. まとめ

2ヶ月間の研修を終え、写真と自身のテーマを深く掘り下げることのできた期間となった。 ドイツで目にしてきたアート作品は、ギャラリーや美術館に陳列されているものだけでなく、街中で見かけるストリートアートにも社会に対

しての自己表現の強さを感じた。自身と向き合い、知ることが私なりの自己表現であると考え、制作を続けてきたが私の作品作りのスタンスは、小さい世界の中のことなのだと痛感した。作品を作るということは、生きていく上で不必要なものなのだろうか。今回のドイツ滞在で、自己表現のための作品作りは決して自己満足なものではなく、一人の人間の社会に対する意見でありたいと強く思った。

今回はフィルムカメラでの制作となったが、街中には少し前の日本と同じように、写真屋を多く見かけた。廃れているわけでもなく、多くの客で賑わっていることに驚いた。Leica をはじめに、ローライやカール・ツァイスなど多く のカメラメーカーがあり、今でもフィルム写真に対する気持ちは変わらないのを感じた。近年、現像代やフィルムの 値上がりが続き、大手メーカーがモノクロフィルムの撤退を発表したのも記憶に新しい。興味のあるものが衰退して いることに残念な気持ちがあったが、最後までフィルム写真にはこだわっていきたいと思えた。

今後も制作は続き、渡独前と変わらず同じテーマで写真を撮り続けるつもりだが、そのテーマに対する見方は大きく 変わった。「自身と他者の境界線」は私が思っているよりも強固なものではなかった。言葉の壁や文化の違いなど、そこに境界線を感じることがあるのかと思ったが、実際に話してみると拙い英語でも相手は一生懸命聞いてくれた。境界線とは私自身の中にあったことを知れたのは、今後の制作に大きな影響を与えるだろう。

このような経験をさせてくれた人々と環境に感謝し、現地で感じたことを忘れず、これからも制作を続けていきたい。

図 1

“Kunstraum Kreuzberg/Bethanien”
As for the teachers, it is a dispatch report

YUINE Kyoko

It is the report which I produced in “Kunstraum Kreuzberg/Bethanien” in Berlin, Germany. I produced the work with the film photograph mainly under the theme of “a boundary line”. I groped for a new expression method in the production environment only in the foreign territory.

図 2

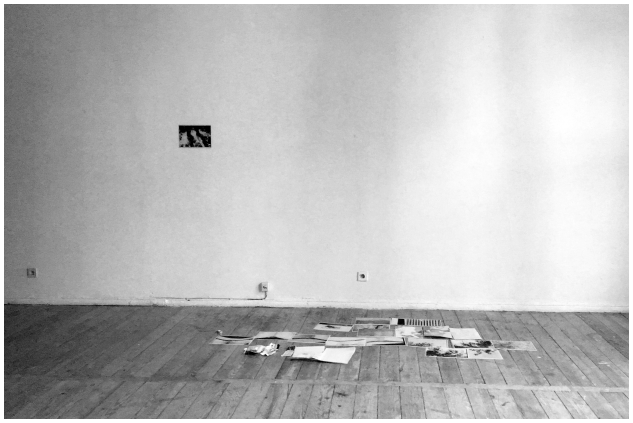

図 3

図 4

図 5

図 6

Meisterwerkstatt
Herstellergarantie
braucht Vertrags
werkstätten

図 7

図 8

Prinzenstrasse
Ritterstra
Oranienstrasse
Prinzessinnen

図 9

図 10

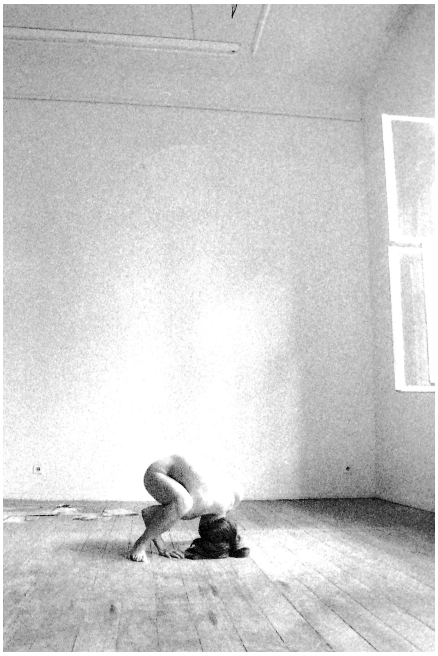

図 11

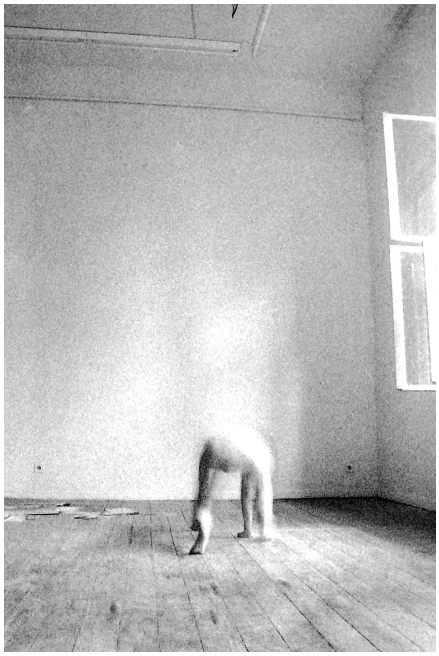

図 12

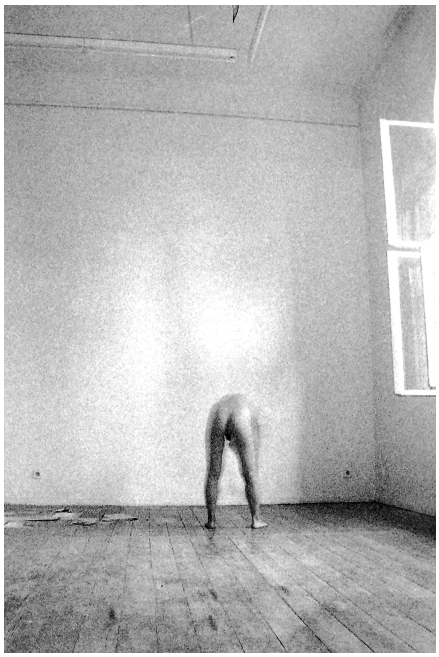

図 13

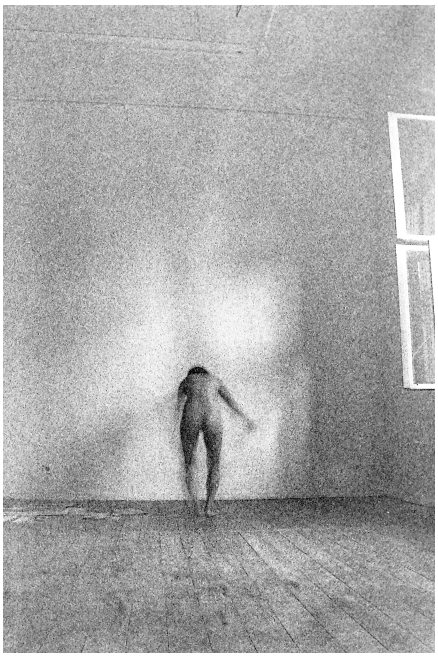

図 14

図 15

図 16

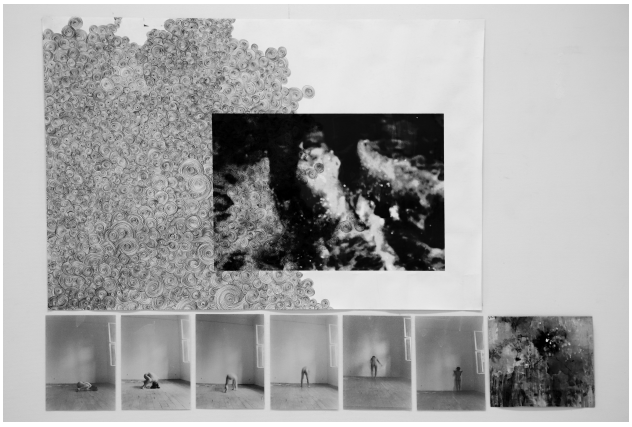

図 18

図 17